

1歳半児の遊びの内容と養育者との相互交渉に関する一考察

木村直子*

(キーワード: 乳児, 遊びの内容, 相互交渉, 1歳半児)

I. 問題意識と本稿の目的

幼児期の子どもたちにとって、主体的活動としての遊びの重要性は周知のことである。子どもたちが生活の中で展開する遊びは、それ自体が自己目的的活動であると同時に、心身のあらゆる面の発達における「重要な学習」として位置づけられている(幼稚園教育要領・保育所保育指針: 中野, 1996)。遊びの研究史を概観すると、遊びの定義や遊び領域の特定化に関して研究者間の統一的な見解は得られていないが、幼児期の子どもの遊びについては、新旧ともに多くの知見が蓄積されている(高橋, 1996)。中でも幼児期早期の子どもの遊びと母子相互交渉に関する研究は、近年の発達心理学及び関連領域における遊び研究の花形であり、子どものコミュニケーション能力の発達における相互交渉の重要性が指摘されている。それらの研究の多くは、プレイルームや実験室等統制された環境下で実施されており、遊び場面の自然な観察によるものはほとんど見当たらない。また日本における相互交渉に関する研究は、視線移動(共同注視・共同注意)や行動に着目したものが多く、情緒的な交流の有無に配慮したものは少ない(常田, 2007)。

本来、相互交渉の本質的な目的は、視線や注意の共有によって、相手の思いを感じ、それを受けて自分の中に何らかの思いが生起し、その生起した思いや感情を互いに共有するという情緒的な交流であると考えられる。

そこで本研究では、第1に、1歳半児の室内における自然な自由遊びの内容を明らかにし、その質的な検討を行う。第2に、自由遊び場面における養育者との相互交渉について情緒的な交流に着目して整理し、1歳半児の遊びの内容と養育者との相互交渉の関連について検討する。そして、第1と第2の結果に精神発達検査の結果を交差させ、幼児期早期の遊びと養育者との相互交渉に関する仮説を探索することを目的とする。

II. 方法

1. データ収集の手続きと調査対象者

観察対象は、対象期間にA市¹⁾の1歳6ヶ月児健康診査を受診した全ての乳幼児(当該月に1歳6ヶ月となる者)と付き添いの養育者、848組であった。観察対象期間は、2007年4月から2009年3月であった。A市における1歳6ヶ月児健康診査の流れ(図1)は、保健センター(市役所健康企画室)より当月の対象児のいる家庭に郵送で知らされ、同封の問診票に記入し、記入した問診票を携えて受診する。健診は、全ての健診項目を同日、同施設の同フロアで、実施する。健診時間は各健診とも受付が12時00分より始まり、最後の受診者の終了までである。

2. 観察内容及び探索的分析枠組

健康診査当日、子どもと養育者が室内に用意されたおもちゃ等を自由に使って、莫塵エリアで健診の順番を待つ様子を観察記録した。健診会場に置かれたおもちゃは、ミニカー、車、プラレール、車輪のついたおもちゃ、ままごとセット、音の出るおもちゃ、太鼓、ラッパ、鈴、タンバリン、びっくりボックス、パズル、人形、人形用に乳母車、フィギュア、買い物用かご、布絵本、乳児用のしかけのある絵本、ボール、ボーリング、プラスチックの積み木、木の積み木であった(図2)。

分析内容は、第一に、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に、子どもの遊び及び養育者との相互交

*鳴門教育大学幼年発達支援コース

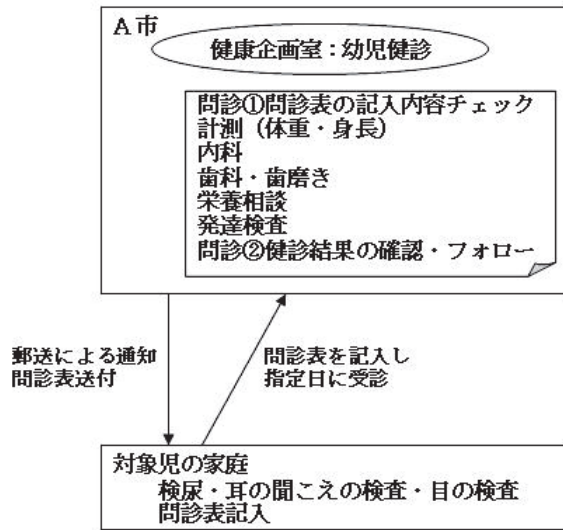


図1 A市における1歳6ヶ月健診の流れ

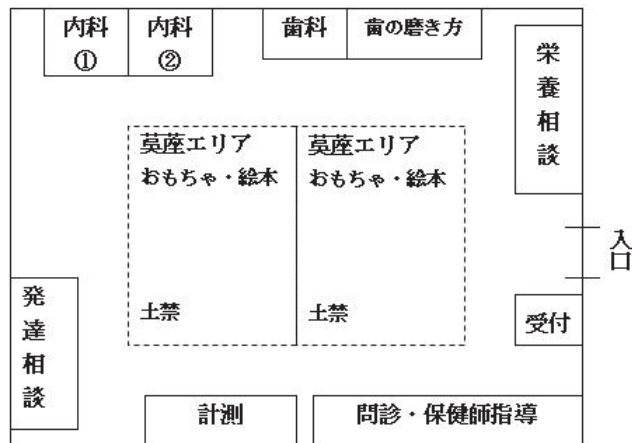


図2 健診会場見取り図

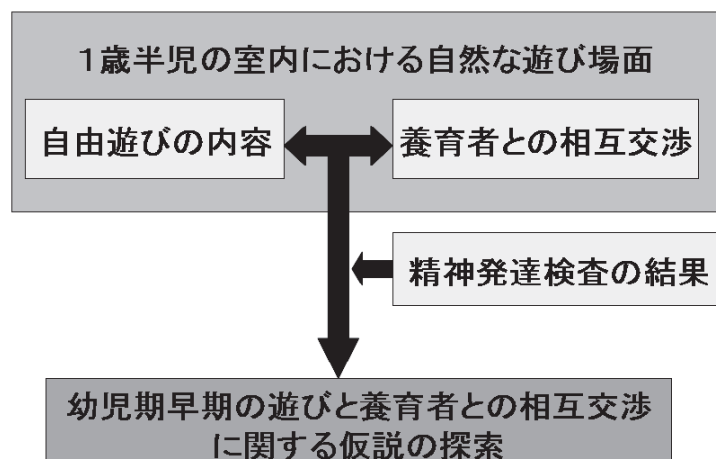


図3 探索的分析枠組み

渉に関するデータを、行動ごとに分析単位として区切り、カテゴリを整理した。幼児の観察ポイントとして①遊びの内容、②他児との交流、③視線、④ことば、⑤行動・姿勢とした。第二に、1回の遊びの成立場面において、子どもの遊び及び養育者との相互交渉に関するデータを、行動ごとに分析単位として区切り、カテゴリを整理した。子どもと養育者との相互交渉に関する観察ポイントには、1歳児の相互交渉内容に関するカテゴリ表(石動, 2009)を参考にした。第三に、新版K式を用いた精神発達検査の結果と検査時の幼児の様子も記録した。精神発達検査時の幼児の様子は、①検査課題の課題性の理解、②主体性と従属性のバランス、③主導権のスムーズな移動、④検査に向かう姿勢、⑤視線の問題、⑥目と手の協応の観点から観察した²⁾。そしてこれらの三つの分析内容を、交差させ、1歳半児の遊びの内容と養育者との相互交渉に関する探索的仮説の設定を試みる。観察内容を分析する枠組は、図3の通りである。

Ⅲ. 結果

1. 抽出された遊びの内容に関する分析

観察によって、抽出した遊び場面は延べ2332場面であった。遊びの内容については、幼児の遊びに関する研究を行っている者とともに構造化法を用いて分類した。その結果、各分類の一致率は82%であった。不一致項目に関しては、先行研究における分類を参考にしながら、協議を重ね、最終的には全てにおいて一致をみた。分類「Ⅰ単純な探索行動」「Ⅱ機能的な遊び」「Ⅲ表象遊び」は、Fiece (1990)の遊びの分類名を用いた。これら3つの分類については、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲの順により高次の遊びであるとされている。「Ⅳ特異な感覚遊び・独特な興味による遊び」は、木村(2009)の乳幼児期の自閉症スペクトラム行動マーカーの遊びの項目分類を用いた。また、「Ⅴ全く遊ばない」は、会場での滞在中一度も遊びの内容が観察されず、なおかつ分類Ⅴにあてはまる行動が目立った場合に分類した。

1歳半児の遊び場面で最も多く見られた遊びの内容は「機能的な遊び」が903場面(38.72%)であり、続いて「特異な感覚遊び・独特な興味による遊び」が723場面(31.00%)、「単純な探索行動」が474場面(20.32%)、「表象遊び」が150場面(6.43%)、「スキンシップ体感遊び」が82場面(3.52%)であった。なお「全く遊ばない」対象児は、98名(全対象児の11.56%)であった。遊びの内容例及び分類は、以下の通りである。

Ⅰ 単純な探索行動

- おもちゃを探す
- おもちゃをいじくる
- 本のページをめくる
- おもちゃを投げる
- 要求されてもいないのに、一方的に配り歩くあそび
- おもちゃを下に落とす
- おもちゃを持ってうろうろする
- 会場のまわりを走る

Ⅱ 機能的な遊び

- 鍋にふたをする
- おもちゃの野菜を切る
- かごに食材をつめる
- がらがらをふる
- たいこをたたく
- 鈴をならす
- パズルで遊ぶ
- 絵本を指差してこれ何?など情報を求める
- 絵本を見る
- 絵本のしかけで遊ぶ
- 車を走らせる

- 2台の車をぶつける
- 車を何かに衝突させる
- ボールを投げる（一人で・相手に向かって）
- ボールを蹴る
- ボーリングをする

Ⅲ 表象遊び

- コップを使って（又は手でコップの形を作り）飲むふり
- お皿・スプーンなどをもって食べるふり
- フライパンのおもちゃで焼くふり
- 買い物かごをもって、出かけるふり
- 人形のおむつを替えるふり（お母さんごっこ）

Ⅳ 特異な感覚遊び・独特な興味による遊び

① めまいあそび

- 車輪を見つめる遊び（めまいあそび）
 - ・ねそべって車輪をみて遊ぶ
 - ・目の高さに車輪を合わせて遊ぶ
 - ・座って斜めから車輪をみて遊ぶ
 - ・車体をひっくり返して車輪を回して遊ぶ

② 並べる遊び

- 車を用いて
 - ・一列縦列に並べる
 - ・一列横列に並べる
 - ・机の縁に並べる
 - ・ふすまの隙間に並べる
 - ・畳やタイルの線にそって並べる
- かいじゅう・ウルトラマンなどフィギュアなどを用いて
 - ・フィギュアの身体の向きや頭の向きをそろえて一列に並べる

③ 色分けをする遊び

- 車を用いて
 - ・同色の車ばかり集める（赤の車ばかり集めるなど）
 - ・黄色は黄色、青は青色、色ごとに区別して並べる
 - ・タクシーばかり集める（同型の車ばかり集める）
- かいじゅう・ウルトラマンなどフィギュアなどを用いて
 - ・同色のフィギュアばかり集める（赤のばかり集めるなど）
 - ・黄色は黄色、青は青色、色ごとに区別して並べる。
- ままごとのおもちゃを用いて
 - ・同色のお皿ばかり集める（赤のばかり集めるなど）
 - ・黄色は黄色、青は青色、色ごとに区別して並べる（野菜など）
 - ・カトラリーばかり集める

④ 調べる遊び

- 車をもちいて
 - ・車の細部にこだわる（ドアの形、エンジンの形など）
 - ・車体の裏に書かれた小さな文字をじっと見る
- かいじゅう・ウルトラマンなどフィギュアなどを用いて
 - ・フィギュアの細部にこだわる（手の形、手が回る回らない、など）
 - ・フィギュアの裏に書かれた小さな文字をじっと見る

⑤体感遊び

- ・身体全体もしくは一部をゆする遊び
- ・身体がこわばる・興奮すると手が開きすこしひきつる
- ・ぴょんぴょんとぶ
- ・爪先立ち歩き
- ・めまい遊び（立って・ねそべってくるくる回る）

Vスキンシップ体感遊び

- ぎったんばっこん
- お馬さんごっこ
- 手遊び（ちょちちょち・いっぽんばし・はじまるよ・どんぐりころころ）
- こちょこちょ遊び

VI全く遊ばない

- 泣いている
- 傍観している
- じっとしている
- ぼーっとしている
- 固まっている

2. 養育者との相互交渉に関する分析

1回の遊び場面の成立時における養育者との相互交渉に関連する行動を抽出し、養育者との情緒的な交流を考慮して、相互交渉に関連する行動を分類した。また、相互交渉の持続性をみるために、相互交渉成立回数を相互交渉型として分類した。相互交渉型の分析には、細川ら（1989）のTurn-Takingの分析における定義を参照した。

1回の遊び場面成立2332場面の中で、最も多く見られた相互交渉に関連する行動は、子どもにおいては「行動による単純な交流」であり、続いて、「無表情での無視・無反応」「単純な注意をむける」であった。養育者においては、「言葉での単純な受け答え」「にこやかな無視・無反応」「行動による肯定的な受け答え」であった。出現の少ない相互交渉は、子どもにおいては「言葉での単純な受け答え」「非共感的な注意を向ける」「共感的な注意を向ける」であった。

情緒的な交流と相互交渉型との関連については、大人から始まる相互交渉よりも子どもから始まる相互交渉の方が、相互交渉成立回数が増える傾向にあった。すなわち1歳半の子どもたちにとって遊びの持続や養育者との相互交渉を楽しむためには、自分の興味関心や遊びのイメージを養育者が共有してくれているかが大きく影響していると推測される。このことは、遊びの内容と相互交渉の関連からも同じように推測される。物を介さない表象遊びにおいて、養育者の「無視・無反応」という行動が増える。子どもから発される「行動による単純な交流」「単純な注意を向ける」に対して、養育者の気づきが得られず（遊びのイメージが共有できず）、相互交渉が成立しないケースや、子どもからの発信に、養育者が「ことばでの単純な受け答え」をすることで、相互交渉が終結してしまうケースが数多く見られた。相互交渉が3回成立するケースについては、子どもからの発信に、養育者が「行動による肯定的な受け答え」「行動による否定的な受け答え」「共感的な注意を向ける」のいずれかをとっていることが分かった。反対に、養育者からの発信で相互交渉が成立しやすいのは、「スキンシップ感覚遊び」における養育者からの肯定的な相互交渉行動に子どもが肯定的または単純な相互交渉行動を返すパターンであった。

1歳半児の遊び場面における養育者との相互交渉の成立状況は、一方の発信に他方の受け答えのない0.5型が最も多く、続いて、0型、1型となった。相互交渉型と出現する遊びの内容については、「機能的な遊び」や「スキンシップ体感遊び」では相互交渉回数が増加する傾向にあり、「単純な遊び」や「表象遊び」では相互交渉が途切れることが多い。また「特異な感覚遊び・独特な興味による遊び」では、子どもたちが自分の世界に没頭する姿が多数見られ、遊び中断させられることでかんしゃくを起こすケースもある。

表1 情緒的交流の有無に着目した養育者との相互交渉に関連する行動の分類

「ことば（音声言語）での受け答え」
「ことば（音声言語）での肯定的な受け答え」 「ことば（音声言語）での否定的な受け答え」 「ことば（音声言語）での単純な受け答え」
「行動による受け答え」
「行動による肯定的な受け答え」 「行動による否定的な受け答え」 「行動による単純な受け答え」
「注意を向ける」
「共感的な注意を向ける」 「非共感的な注意を向ける」 「単純な注意を向ける」
「無視・無反応」
「にこやか表情での無視・無反応」 「否定的な表情での無視・無反応」 「無表情での無視・無反応」

表2 相互交渉型

分類型	見られる行動	相互交渉成立回数
0型	全く応答希求行動が見られない。	0回
0.5型	一方からの応答希求行動に対して相手の応答希求行動が見られない。	0回
1型	一方からの応答希求行動に対して相手の応答希求行動が見られる。	1回
1.5型	1度の相互交渉の成立後に、その応答希求行動に関連した行動がもう一方から生じる。	1回
2型	1度の相互交渉の成立後に、その応答希求行動に関連した行動がもう一方から生じ、さらにそれに対する相手からの応答希求行動が見られる。	2回
2.5型	2度の相互交渉の成立後に、その応答希求行動に関連した行動がもう一方から生じる。	2回
3型	2度の相互交渉成立後に、その応答希求行動に関連した行動がもう一方から生じ、さらにそれに対する相手からの応答希求行動が見られる。	3回

表3 相互交渉型と出現する遊びの内容

分類型	該当場面数	遊びの内容等考察
0型	723場面	全数がⅣ特異な感覚遊び・独特な興味による遊び
0.5型	894場面	Ⅰ単純な探索行動 Ⅲ表象遊びが中心
1型	540場面	Ⅰ単純な探索行動 Ⅱ機能的な遊び Ⅲ表象遊び Ⅴスキンシップ体感遊び
1.5型	68場面	Ⅰ単純な探索行動 Ⅱ機能的な遊び Ⅲ表象遊び Ⅴスキンシップ体感遊び
2型	47場面	Ⅰ単純な探索行動 Ⅱ機能的な遊び Ⅲ表象遊び Ⅴスキンシップ体感遊び
2.5型	53場面	Ⅰ単純な探索行動 Ⅱ機能的な遊び Ⅲ表象遊び Ⅴスキンシップ体感遊び
3型	60場面	全数がⅤスキンシップ体感遊び

3. 精神発達検査について

新版 K 式を用いた精神発達検査の結果を、知的な発達、認知・社会性の発達の偏りの2側面から評価した。知的な発達の評価(表3)については、各検査の通過年齢は10ヶ月～1歳3ヶ月程度とし、全ての項目ができた者を E (終了)、できない項目が1つの場合を SS (少し心配)、2項目以上の場合を S (心配) と評価した。全対象児における E 評価は606名 (71.46%)、SS 評価は212名 (25.0%)、S 評価は30名 (3.54%) であった。

それぞれの評価における遊び内容の出現状況は、知的な側面 E のケースにおいて、IV 特異な感覚遊び・独特な興味による遊び、VI 全く遊ばないが多数見られた。また遊びの先行研究に順序性が指摘されていた I 単純な探索行動、II 機能的な遊び、III 表象遊びについても、S・SS・E 評価において顕著な出現数の違いは認められなかった。

表 4 精神発達検査の内容と知的な発達の評価

検査名	内容	評価
積み木の塔	子どもの前に積木を一つ提示し、別の積木を手渡して、「この上に積んでごらん」「高い高いをしよう」と二重に教示する。 判定：子どもが独立で最も積んだ積木の段数で決定	積み木の塔 3 段 (通過年齢 1 : 3)
はめ板	●のはめ板をはずす (通過年齢 0 : 8)。●のはめ板をはめる (通過年齢 0 : 11)。円板を回転させてはめ板をはめる (通過年齢 1 : 3)。	はめ板をはずす (通過年齢 0 : 8) はめ板をはめる (通過年齢 0 : 11)
絵指示 指差し	「この絵をよくみてごらんさい」「犬はどれですか」と教示する。犬が指示できないときは幼児語で「ワンワンはどれですか」と教示する。	指差しができる (通過年齢 1 : 0)
ばいばい	検査が終了して、子どもが席から離れるとき、検査者が子どもに「バイバイ」と声をかける。初めは、声だけ・その後声・身振り。	バイバイ (通過年齢 0 : 9)

認知・社会性の発達の偏りの行動に関する評価は、検査場面において3つ以上の行動が認められたとき、H(発達障害の疑いあり)と評価した。その結果、Hと評価された対象児は、417名 (49.17%) であった。H 評価と H 評価なし群における遊び内容に関する特徴は、顕著であり、H 評価群においては、I 単純な探索行動、IV 特異な感覚遊び・独特な興味による遊びがより多く出現する一方、V スキンシップ体感遊びはほとんど見られなかった。

表 5 精神発達検査時の認知・社会性の発達の偏りに関する具体的行動

内容	着目点
積み木の塔	①積み木で全く異なるものをつくりはじめる ②教示をしても横に並べる ③投げる ④積み木を両手に持ってカチカチ ⑤教示の前にはじめる ⑥課題中、達成感共有のために保護者や検査者をみない ⑦積み木を斜めに見る、目の高さにもってくる
はめ板	①円板をたたきつけ、静止の指示が入らない ②はめたりはずしたりを何度も繰り返し、静止の指示× ③課題中、達成感共有のために保護者や検査者をみない ④円板ではなく、はめ板をひっくりかえすことに興味がいく
絵指示 指差し	①絵図版には関心を示すが、教示が届かない ②絵図版を何度も裏返してみる ③人差し指以外の指で、指さす ④絵図版をじっとみつめる ⑤自分で指ささず、Mo や検査者の手を取り、指さすことを促す。Mo や検査者の手を使って指さす (クレーン現象)
ばいばい	①逆さバイバイ (掌の向き) ②ひらひら③キラキラ④たてふり

「知的な発達」と「認知・社会性の発達の偏り」の2変数のクロス集計は表6の通りである。 χ^2 検定は行えな

いが、知的な側面に関する評価が E と SS については、認知・社会性の発達の偏りに関する割合でみると、大きな差が見られない。しかし、S 評価になると、N 数も少ないこともあり、90%において認知・社会性の偏りが見られた。

表6 「知的な発達」と「認知・社会性の発達の偏り」の2変数のクロス集計

		認知・社会性の発達の偏りあり	認知・社会性の発達の偏りなし	計 (%)
知的な側面	E	285 (47.03)	321 (52.97)	606 (100)
	SS	105 (49.53)	107 (50.47)	212 (100)
	S	27 (90.00)	3 (10.00)	30 (100)
	計	417	431	848

IV. 結果のまとめと考察

本稿では1歳半児とその保護者が遊ぶ場面を観察し、観察した内容を行動ごとに分析単位として区切り、カテゴリを整理した。カテゴリ化したデータを用いて、遊びの内容、保護者との相互交渉行動、相互交渉成立回数等で分析した結果、以下のような仮説を導き出した。

- (1) 遊び場面において、1歳半児が発信する相互交渉に関連する行動は、必ずしも肯定的な相互交渉行動ではない。その見えづらい相互交渉行動を養育者がキャッチすることで、相互交渉成立回数が増加する。
- (2) 1歳半児では、知的な発達の状態に関わらず、養育者との相互交渉を成立させることが、遊びの内容をより高次なものへと発展させる要因の一つとなる。

V. 今後の課題

研究方法に対する課題が最大の課題であり、ひいては探索的仮説のみならず、分析結果自体も曖昧なものとしてしまう可能性がある。第一に、研究手続きにおける曖昧さがある。観察方法については、研究室実験やプレイルームでの観察など、場面が構造化されている研究と異なり、自然な場面での観察は、記録媒体にも制限が出てくる。本研究では、公的な機関に多目的のために参加した人を観察対象者としていることや、子どもと養育者が自然に遊ぶ様子を観察するため、ビデオカメラやカメラ等での記録は行わず、見聞きしたものを紙媒体にメモするフィールド研究法をとった。そのことによって、対象者に違和感を感じさせることはなかったが、記録できる量及び質ともに一定水準の妥当性があるとは言い難い結果となった。また今後、探索的仮説を実証する研究方法やどのようなフィールドで研究を行っていくことが望ましいのかについては、熟考が必要な課題といえる。

脚注

- 1) A市は、小さな地方都市であり、2011年3月現在、人口約61,000人；18歳未満の子どものいる世帯；5795世帯（うち6歳未満の子どものいる世帯は2233世帯）である。
- 2) 精神発達検査は、本来乳幼児の知的発達を測定するものである。本稿での観察は、知的な発達とは独立な観点から観察した（表5）。詳細については、別論文を参照されたい（木村，2009）。

付記：本報告は、文部科学省若手研究（B）「チームアプローチのための乳幼児期の自閉症スペクトラム行動特性に関する基礎的研究」（代表：木村直子）の一部である。

引用・参考文献

幼稚園教育要領 文部科学省 平成20年3月

保育所保育指針 発行：厚生省厚生省児童家庭局 平成11年10月29日（児発第799号）編集：保育指針研究会
平成17年10月12日 平成20年4月 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課

木村直子「幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法」『鳴門教育大学研究紀要』24, 13-19, 2009

石動瑞代「子ども間の相互交渉が1歳児の発達に及ぼす影響」『富山短期大学紀要』45, 65-80, 2010

Fiese BH. Playful relationships: A contextual analysis of mother-toddler interaction and symbolic play.
Child Development, 61, 1648-1656, 1990

高橋たまき・中沢和子・森上史朗『遊びの発達学』基礎編・展開編 培風館 1996

常田美穂「乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割」『発達心理学研究』18(2), 97-108, 2007

細川かおり・橋本創一・池田由紀江「精神遅滞児の母子遊び場面における相互交渉の分析」『心身障害学研究』14
(1), 53-60, 1989

The Fact-finding of a Play Action of an Infant and Infants' Responses during Interaction with Their Parents or Companions

KIMURA Naoko

(Keywords : Infant, Interaction, Play action, 18-month-old infants,)

Abstract : The purpose of this article was the fact-finding of a play action of an infant and infants' responses during interaction with their parents or companions at the time of 18-month-old infants health check-ups visit. The subjects were selected from among those who a 18-month-old infants health check-ups between April 2007 and March 2009. Observation date were conducted content analysis technique, then and created two hypothesis. First, infants' responses in free play during interaction with their parents or companions were not positive. Second, play action of an infant was influenced by interaction with their parents or companions without mental ability level